



Title	アルプスを見る詩人 : ヘルダリーンとエーベル
Author(s)	廣川, 智貴
Citation	ドイツ啓蒙主義研究. 2019, 16, p. 35-46
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/72769
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

アルプスを見る詩人

—ヘルダリーンとエーベル—

廣川 智貴

はじめに

いわゆる啓蒙主義時代は自然科学が飛躍的に発展した時代でもあった。地質学もそうした学問のひとつであり、その影響は文学にまでおよんでいる。カール・リヒターは、その著『文学と自然科学』のなかで、アルブレヒト・フォン・ハラーの『アルプス』にみられる地質学の影響を指摘している¹。このような文学と地質との交わりは、啓蒙主義時代からロマン主義の時代を経て、現代に至ってもなお脈々と継続している。たとえば、シェレンベルガー＝ディーデリヒの好著『地質詩学』は、ヘルダリーンからパウル・ツェランにまで至る、文学と地質との関係に光をあてている²。

こうした地質とドイツ文学に関するモノグラフィを読みすすめるうちに、私の関心を惹いたのは 18 世紀におけるアルプス研究の第一人者ヨハン・ゴットフリート・エーベル（1764-1830）とドイツを代表する抒情詩人フリードリヒ・ヘルダリーン（1770-1843）との関係であった。ヘルダリーンの専門家にとっては自明のことかもしれないが、これまでおもに啓蒙主義期の作家について学んできた私にとって、この両者の結びつきは意外に思われた。というのも、いわゆる抒情詩人の典型といわれるこの詩人と自然科学との結びつきを、どうしてもイメージすることができなかつたからである。ヘルダリーンについて論じる資格は私にはない。しかし、啓蒙主義期にすでにみられる文学と自然科学との結びつきのその後の展開を追うことで、反対に啓蒙主義文学に光をあてることのできるのではないか。こうした期待に導かれつつ、本論ではヘルダリーンとエーベルの関係を紹介したい。

1. 地質学の誕生と自然観の変化

山のイメージはじつにさまざまである。たとえば、筆者の仕事場から望むことのできる比叡山から大文字山への連なりは、どこか私の心を落ち着かせてくれる。他方で険しく横たわるヨーロッパのアルプスは、長きにわたって人びとに恐怖と嫌悪を抱かせるものであった。このようなアルプスが肯定的なイメージで捉えられるようになるのは、ようやく 18

世紀になってからのことである³。

たとえば、カントは、『判断力批判』（1790）の第2章「崇高なものの分析論」のなかでこう言っている。

急峻な張り出した、いわば威嚇するような岩石、電光と雷鳴をともなって大空に湧きあがり近づく雷雲、すさまじい破壊的な威力のかぎりをつくす火山、惨憺たる荒廃を残して去る暴風、怒濤逆巻く際限のない大洋、強大な水流の高い大瀑布などは、これらのものの力と比較してわれわれの抵抗の能力を取るに足りないほど小さなものにする。しかし、われわれが安全な場にいさえすれば、これらの眺めは恐るべきものであればあるほど、ますます心を引きつける。そしてわれわれは、これらの対象を好んで崇高と呼ぶ。なぜなら、これらの対象は魂の強さを通常を超えて高揚させ、われわれのうちにあるまったく別の種類の抵抗の能力を発見させて、この抵抗の能力が、自然の外見上の全威力に匹敵するという勇気をわれわれに与えるからである⁴。

この箇所は重要な美的カテゴリーである「崇高」に言及する際にしばしば引き合いに出される。カントによれば、恐怖の対象であった自然現象が、今や「崇高」なものとなり、私たちの心を高揚させるのである⁵。

もうひとつ有名な例を挙げておこう。ジャン＝ジャック・ルソーである。彼の書簡体小説『新エロイズ』（1761）は、ジュネーブ湖畔を背景にして、男爵令嬢ジュリーと家庭教師サン＝ブルーとの恋を描いているが、その第1部第23書簡のなかで、ルソーはサン＝ブルーの筆を借りて、山の様子をこう記している。

この不思議な国々をかくも奇妙に対照的にしているものは単に人間の仕事ばかりではありませんでした。さらに自然もそこでは矛盾対立することに興じているようでした。それほど同じ場所においてさまざまな相貌の下に変化を示していたのです。東の方には春の花、南の方には秋の木の実、北には冬の氷と、自然は同じ時にあらゆる季節を、同じ場所にあらゆる風土を、同じ土地に相反した地質を集め、平野の産物とアルプスの産物とのどこにも見られない調和をなしておりました⁶。

ここでは自然が全体として捉えられており、それによって矛盾は調和へと昇華されている。

このように18世紀後半に活躍した文学者や哲学者たちは、山のイメージを否定的なものから肯定的なものへと捉え直そうとした。こうした自然観の変化が地質学の成立とほぼ時を同じくしていることは、おそらく偶然ではないだろう。カントも言うように、われわれが「急峻な張り出した、いわば威嚇するような岩石」にも「崇高」を感じることができるのは、危険におびえることのない「安全な場」にあるからである。地質学のもたらす成果

は、まさにこうした安全性を保証するものだろう。

今日の意味での「地質学」(Geologie)という言葉がはじめて使用されたのは1778年のことだった。この新しい学問はたちまちのうちに人びとを魅了した。とりわけ鉱山に対する関心は大きかった。19世紀初頭の旅行ガイドブックに目をやると、鉱山がおすすめスポットとして紹介されている⁷。また、1790年から1820年にかけてドイツ語圏で発表された文学作品に鉱山のモチーフがしばしば登場することからもわかるように、地質学は作家をも捉えたのだった⁸。たとえばあのゲーテも地質学と深い関わりをもっていた。大学で法学を専攻した彼は、たしかに地質学を専門的に学んだわけではない。だが、ザクセン＝ヴァイマル公国の若き役人となったゲーテは、イルメナウの銀鉱山の再開発を任せられ、地質について学ばざるを得なくなる。このときゲーテは、みずからに与えられた課題をはたそうと、鉱山開発の技術や管理の知識を習得したのだった。こうした経験は、彼のうちに地質学への関心と呼び覚ましただけでなく、創作にもいかされている⁹。

また、いわゆるロマン派に属する作家たちも、地質学とはけっして無縁ではなかった。たとえば、法律を学んだノヴァーリスは1784年にザクセン選帝侯領の製塩所監督官を務める。しかし、鉱山に関する知識の不足を感じると同時に「自然学」の基礎を固めようとした彼は、1797年にフライベルクの王立鉱山アカデミーに籍を置く。ここは当時の地質研究のメッカであった。この地で著名な地質学者アブラハム・ゴットロープ・ヴェルナーのもとで学んだノヴァーリスは、その後1801年の死に至るまで塩山や鉱山の監督官を務めたのだった。こうした体験は彼の名著『青い花』や『サイスの弟子たち』などからも読み取ることができる。

このように地質学は、一般の人びとのみならず、作家たちにも大きな刺激を与えたのだが、ヘルダリンもそうした一人であった。とりわけ、当時アルプス研究の第一人者であったエーベルとの交友は、この詩人にとってきわめて重要であったように思われる。そこでまずはヘルダリンとエーベルの出会いについて振り返ることにしよう。

2. ヘルダリンとエーベル

ヘルダリンが現在に至るまで大きな影響をおよぼし続けている抒情詩人であることは誰もが認めるところだろう。彼はヘーゲルやシェリングといった哲学者たちと交流があったことでも知られている。実際に、ヘルダリンがこれらの思想家から強い影響を受けていることは、つとに指摘されてきたとおりである。こうした事情もあってか、彼の作品はその後も哲学者たちの関心を惹いてきた。たとえば、ハイデガーもこの詩人に魅力を感じ、作品を分析しているし、最近ではラクー＝ラバルトの名を挙げることもできるだろう。こうした哲学者との結びつきがあるからだろうか。ヘルダリンの作品には、とかく難解というイメージがつきまとっている。

だが、ヘルダリーンの交友は、なにも哲学者だけに限られていたわけではない。ヘルダリーンの伝記では「医師」として登場することの多いエーベルも、彼の大切な友人のひとりであった。彼から手紙を受け取ったヘルダリーンは、1799年11月にエーベルにこう返信している。

私が言葉につくせぬほど深く感じましたことは、最初にお会いした瞬間以来（筆者注：1795年6月13日ハイデルベルク）、あなたが私にとってどんなに大切な方であったかということであり、もはやお会いしなくなって以来、自分の失ったものがどんなに大きかったかということでした。（III 406）

この手紙から推察できるように、エーベルは、ヘルダリーンの人生において、きわめて重要な役割を果たした。フランクフルトのゴンタルト家のかかりつけ医だったエーベルは、ヘルダリーンを家庭教師としてこの一家に推薦したからである。そのおかげでヘルダリーンは、のちに世界の核心を形成する理想像ディオティーマへと昇華することになる、あのゴンタルト家のズゼッテ夫人と出会うことができたのであった。

やがてヘルダリーンの詩作に大きな影響をおよぼすことになるズゼッテ夫人を仲介したということだけでも、エーベルの存在は大きかったと言えよう。だが、注意しなければならないのは、彼の意義がこれにとどまるものではないということである。

1795年11月9日付の手紙のなかで、ヘルダリーンはエーベルにこう記している。

すぐにお目にかかれないのならば、あなたの文学（学術）上の仕事（literarische Arbeiten）や、その他のあなたが心を傾けておられるお仕事について、詳しく知らせていただけないでしょうか。知らせていただいても、私には、あなたを理解したという証拠以外には、何もお返しすることができないかもしれませんが。（III 207、強調は引用者）

ここからわれわれは、ヘルダリーンがエーベルの「文学上の仕事」に関心を持っていたことを知ることができる。では、ゴンタルト家のかかりつけ医であったエーベルの「文学上の仕事」とは、いったい何だったのだろうか。

エーベルの著作の扉には、しばしば著者名のわきに「医学博士」と記されている。だが彼の活動がたんに医師にとどまらないことは、一般的な人名辞典を繙くだけでもあきらかとなる。試みにフランクフルト人名辞典をみてみよう。そこにはこう記されている。「ヨハン・ゴットフリート・エーベル（1764－1830）：地質学の研究（アルプスの構造、地磁気）、フンボルト兄弟、サヴィニー、シュタインとの往復書簡、ヘルダリーンやフィヒテの友人として知られる」¹⁰。つまり、エーベルは、「医師」であるだけでなく、「地質学」の分野でも業績を残した人物として紹介されているのである。実際にスイスのアッペンツェルに

あるエーベンアルプには、エーベルの記念碑が掲げられており、そこにも「アルプス研究者」と記されている。

ヘルダリーンがエーベルの「文学上の仕事」に関心を寄せていたちょうどその頃、エーベルは当時としては画期的な書物を出版していた。それはいわばスイス・ガイドブックとでもいえるものであった。ヘルダリーンがエーベルの「文学上の仕事」に言及するとき、おそらく彼はこうした書物のことを意識していたのではないだろうか。しかもその書物があらわれた数年後の1796年、彼らは数ヶ月のあいだ同じフランクフルトに暮らしていたというから、ふたりのあいだにこの書物をめぐる議論があったとしても不思議ではない。そこでわれわれは、当時評判になったこのエーベルの仕事を概観することにしよう。

3. エーベルの仕事ーパノラマの技法

エーベルの名を一躍有名にしたのは、『スイスをきわめて有益かつ楽しく旅行するための手引き』（1793、以下『手引き』と略記）であった。これは初版から1843年までに8版を重ねたベストセラーであり、英語やフランス語にも翻訳されたという。この書物は2部からなっている。第1部では、旅行者のためのアドバイスが記されている。また第2部はアルファベット順の項目からなるいわば百科事典である。1790年から92年にかけてスイスを旅行したエーベルが、自身の体験をふまえて執筆したのがこの『手引き』であった。それだけにこの書の内容は、具体的できわめて実用的なものである。初版ではスイスを旅する人々に役立つ情報が私見を交えて詳細に記されている。その意図は「スイスのことをよく知らない人に、あらゆる形をとった豊かな自然の楽しみをもたらす」¹¹ことにあった。しかし、大幅に増補された1804年の改訂版では、初版に寄せられた批判に応えるという意図もあつてか、個人的な感想や意見よりもむしろ、植物、鉱物、地質に関する客観的な事実の提供がめざされている。したがって改訂増補版では、より学術的な客観性が強調されていると言えるだろう。

目次を一瞥すればあきらかなように、『手引き』は旅行のルートから為替相場に至るまでのきわめて詳細な旅行案内で、文化的な資料としても貴重なものである¹²。われわれに興味深く思われるのは、第1部第2章「スイスは誰にとって注目すべきところなのか？」において記されているような、エーベルの抱くスイスやアルプスにみられる自然のイメージである。これはエーベルの著作を貫くものでもある。「多くの点を鑑みて、スイスほどわれわれの地上に興味深い国や地域はないだろう」というスイス賛辞に続けて、「人間や広い意味での哲学者は、スイスのほかには考察、観察、純粋な生の楽しみに必要な豊富な素材を見つけることはできない」¹³とまで断言される。「地質学に関心のある者は、この山を歩き回らなければならない。なぜなら、そこには自然という書物が開かれているからである」¹⁴と地質学への言及もみられる。

エーベルをこうした賞賛へと駆り立てたのは、なによりも自然の美しさであった。ルソーと同様にエーベルも、スイスのうちに自然の多様性を認めている。

大きなもの、異常なもの、驚きに値するものすべて、戦慄をもたらす恐ろしいものすべて、美しいもの、穏やかなもの、魅力的なもの、明るいもの、静かなもの、甘美をもたらすものすべて、こうした自然全体のなかに散在しているものが、ここスイスという小さな空間にまとめられている。あたかもこの地を自然崇拝者が巡礼に訪れるヨーロッパの庭とするかのようである¹⁵。

このようにエーベルは、スイスの自然をあらゆるものを包含する場所として捉えようとするのである¹⁶。

われわれがここで注目したいのは、このような多様なゆえに矛盾をもあわせもつ自然現象を、エーベルが個別の現象としてだけでなく、全体としても捉えようとしていることである。「概して自然の喜びは、多くの地域で一歩進むごとに生じるような変化や多様性によってだけでなく、あるひとつの点から見たひとつの風景の四季折々の多様性によって高められる」（強調はオリジナル）¹⁷。さらに、『手引き』の数年後に刊行された『スイス山間部の人々の描写』（第1部1798年、第2部1802年）にも、こう記されている。

私の目はこの新しい自然という舞台に変わることなく釘付けになった。この新しい自然は、その広大な姿で魅了し、その個々の部分の探求を不可能にする。私は偉大な全体の観察に没頭し、この新しい印象が私の心の中でもたらず気持とのみ関わりあったのだった¹⁸。（強調は引用者）

いずれの引用にも共通するのは、移り変わる多様な自然を「ひとつ」の視点からまとめて捉えようとするパノラマ的な見方である。トーマス・ゲルマンも、「自然全体をひとつの視点から俯瞰する必要性」¹⁹こそ、エーベルをスイス旅行へと駆り立てたのだ、と指摘している。また、『手引き』改訂増補版第2部に、アルプスのどこでパノラマ的展望を得られるかを具体的に記した「展望」（Aussicht）という項目が追加されているのも、そうしたエーベルの傾向のあらわれであろう²⁰。

ここで強調しておきたいのは、エーベルがこうしたパノラマの技法をただ頭の中で想い描くだけでなく、図という形で具体的に表現していることである。その成果は折り込みの図版として『手引き』にも収録されている。エーベル自身の手になるというこのパノラマ図は、不正確だという批判もあったようだが、それでもやはり当時にあってはじつに斬新な試みであり、『手引き』をより魅力のあるものにしていく。

4. 詩「ツィンマーに」とパノラマ

それでは、エーベルの自然観の特徴でもあったパノラマが、ヘルダリーンの詩作にいったいどのような影響をおよぼしているのだろうか。ヘルダリーンの晩年の詩「ツィンマーに」を手がかりにして、その一例を見ることにしよう。

ツィンマーに
生の引く線はとりどり
道のように 山の境のように。
こちらのわれらのありようを あちらで神が補足する
調和と 永遠の報酬と 平和とで。

AN ZIMMERN

Die Linien des Lebens sind verschieden

Wie Wege sind, und wie der Berge Grenzen.

Was hier wir sind, kann dort ein Gott ergänzen

Mit Harmonien und ewigem Lohn und Frieden. (I 454)

わずか4行からなるこの詩は1812年の成立と言われている。タイトルにある「ツィンマー」とは、精神を病んだヘルダリーンを、病院から自宅へ受け入れた指物師のことである。ヘルダリーンは1807年から1843年の死にいたるまで、このツィンマー家で過ごした。1812年、ヘルダリーンは発熱を伴う下痢に苦しみ、診察した医師も万が一のことを覚悟するようツィンマーに告げる。幸い大事には至らず、ほどなくして詩人の病は回復する。一時的に精神の落ち着きを取りもどしたヘルダリーンは、ツィンマーのもとでとある神殿の素描を目にする。そして指物師であるツィンマーに、そのような神殿を木で作るよう依頼する。それに対してこの親方は、「パンのために稼いでいるのだから、あなたみたいな哲学者のような暇はない」と答えたと言う。それに対してヘルダリーンも、「私だってあわれな人間なんだ」と言い、この詩を書いたと伝えられている。

この作品は後期の詩で、いわゆる「塔の詩」とよばれるもののひとつである。「塔」とはツィンマー家でヘルダリーンが暮らしていた場所をさしている。現在では「ヘルダリーンの塔」とよばれているこの建物の三方には窓がしつらえられている。その南側の窓からはネッカー河を見下ろすことができ、対岸のかなたにはスイス・アルプスほど立派ではないものの、シュヴァーベン・アルプスの連なりを目にすることができる。ヘルダリーンはことのほか山を見、山から見おろすことを好んだ。ヴィルヘルム・ヴァイプリングーは、すでに精神の病にあったヘルダリーンをしばしば訪れ、テュービンゲンを見おろす小高い丘に詩人を連れ出して喜ばせたという。ヴァイプリングーはその時の様子を以下のように報

告している。

ここ（筆者注：ヴァイプリンガーの別荘）から人びとは、親しみのある緑の谷々、城のある高台に接した町、ネッカー川の曲折、晴れやかな多くの村、アルプスの連なりを展望することができる。（・・・）全体として言えば、屋外にいるときに彼の具合がよくなることに私は気がついた。そのとき彼はあまりひとりごとを言わなくなるのだ。そしてこれこそ、彼の頭がいつもより晴れていることの完全な証拠に思われるのである²¹。

また、1794年8月21日に弟に宛てた手紙からも、若きヘルダリーンのパノラマ的な展望への関心がうかがわれる。

先週の日曜日に、レームヒルトから1時間ほどのところにある、広い平野の中にそびえたグライヒ山に登ってきた。東の方には、フランケンとベーメンの境にあるフィヒテル山脈が、西の方には、フランケンとヘッセンの境をなすレーン山脈が、北の方には、フランケンとテューリンゲンの境をなすテューリンゲンの森が、そして南西の、わが愛しのシュヴァーベンの方には、地平線の果てにシュタイガーの森が見えた。できるものならば両半球の地理を勉強したいものだ！（III 152）

このように、パノラマへの傾向はヘルダリーンに継続してみられるものであった。それはまた詩「ツィンマーに」にもあらわれている。この詩でも山への眺望と人間の生とが重ねあわされているからである。詩の1行目「生の引く線はとりどり」は、2行目で「道のよう 山の境のよう」と補われることで、山のイメージと結びつけられる。だが、こうして具体的なイメージで補足されてもなお、「生の引く線」とはいささか曖昧である。われわれはこの「線」をどのように理解すればよいのだろうか。

すでに述べたように、エーベルの『手引き』には、彼自身の手になるパノラマ画像が挿入されていた。5つ折りで綴じ込まれたこの図は、パノラマの初期に属することもあり、当時たいへんな好評を博したのだった。エーベルの仕事に注目し、しかもパノラマに関心を持っていたヘルダリーンのことである。おそらくこの図を目にしていたにちがいない。シェレンベルガー＝ディーデリヒも、「エーベルのパノラマと展望への偏愛がヘルダリーンに強い影響をおよぼした」²²と指摘している。われわれにとって興味深いのは、エーベルも自身のパノラマ図を説明するのに、やはり「線」（Linie）という言葉を使用していることである。

ちょうどホーホヴァハトの向かいにある岩山（Q.）は7～8時間、そしてアルプスの連なりにある（P.）はそこから直線で12～3時間離れている。

この図で人々は、アルプスの連なる東の始点とラウテンブルンの谷にまで至る西方の広がりを目にする(…)。この連なる線(Linie)はおよそ4~50時間ほどかもしれない²³。(強調は引用者)

ここでいわれる「線」とは、いわゆる山稜のことで、山脈と空を区別する線を意味している。人生は山あり谷ありというが、エーベルのパノラマ図に描かれている「線」もけっして平坦ではなく、ひとつとして同じところがない。ヘルダリーンのいうところの「生の引く線」というイメージは、こうした山稜のイメージと重ねられているように思われる。

人生の紆余曲折を山の「線」にたとえたヘルダリーンの詩は、山のこちら側に位置するわれわれと山の向こう側に存在する神という対比へと移行する。ここでヘルダリーンがかつてエーベルに宛てた手紙を思い出しておくのも無駄ではないだろう。1795年9月2日にエーベルに宛てた手紙には、家庭教師の職を希望するヘルダリーンが、「地理」の教育について述べた次のような箇所がある。

自分の見ている山の向こうに何があるかを知りたいと思わないような子供は、めったにいないと思います。もし地理が、どこにでもあるような、死んだ紙の上だけの地理ではなく、旅行の楽しさを味わうことができるガイドブックのような、生き生きした地図であるなら、地理の授業は、要求も強制も必要とせずに、子供の頭に入っていくだろうと私は思います。(III 201f. 強調は引用者)

「ツィンマーに」を執筆したヘルダリーンが、はたしてこうした言葉を覚えていたかは定かではない。しかし、エーベルという優れた教師による旅行ガイドを手にし、そこに収められた「地図」で地理を学び、想像力を働かせて創作されたのが「ツィンマーに」であったように思われる。山の向こうに何かがあると漠然と予感していたかつての生徒は、エーベルというすぐれた教師による「地理」の授業を受け、山の「線」の存在を知る。その明確な「線」のおかげで詩人は、多様な人生のみならず、「山の向こう」に慰めとなる神がいることをはっきりと認識し、それを詩として表現できたのではないだろうか。その意味で「ツィンマーに」という作品は、若きヘルダリーンの理想とした地理教育の成功例であったとも言えよう。

むすび

本論文では、地質学と文学という観点から、とくに地質学者エーベルの仕事から、詩人ヘルダリーンの作品に光をあててみた。そこであきらかになったのは、彼の詩においては、漠然と予感されていた神のイメージが、自然科学との出会いによって明確な形をとったと

ということである。いささか唐突に思われるかもしれないが、ここで私が思い出すのは、初期啓蒙主義を代表する詩人バルトルト・ハインリヒ・ Brockes (1680–1747) である。というのも、彼もやはり自然科学の影響をうけながら、神の存在をあきらかにしようとしたからである。たしかに Brockes の仕事は、当時の自然神学の影響下でなされたいわば弁神論の試みであり²⁴、ヘルダリーンの詩にあらわれる神とは異質なものである。しかし、自然科学による神の存在証明という意味では、両者は同じ線上にあると言えるのではないだろうか。

このように、ヘルダリーンのみならず、18 世紀ドイツの作家の多くは、自然科学をはじめとするさまざまな学問領域に関心を示し、それをみずからの創作に活かそうとした。詩人としてよりもむしろ、自然科学者として認められたかったというゲーテは、その典型的な例であると言えよう。こうしたいきいきとした知の交わりは、いわゆる文系と理系という境界を軽々と越えてゆく。これら両者の関係の見直しが迫られている今日にあって、ヘルダリーンとエーベルの交流は、ひとつの例を示しているように思われる。

本論文は、2015 年 9 月 11 日に開催された大谷大学西洋文学研究会年次大会における口頭発表「山を見る詩人—ヘルダリーンと地質学」を加筆修正したものであり、2015–2016 年度日本学術振興会科学研究費助成事業、挑戦的萌芽研究「文化地質学：人と地質学の接点を求めて」（課題番号 15K12438）による研究成果の一部である。

ヘルダリーンからの引用は、Hölderlin (1992)により、本文中に巻数とページ数を記した。また、翻訳にさいしては、『ヘルダーリン全集』（1966）を適宜参照した。記して謝意を表す。

主要参考文献

- Böschstein, Bernhard (1983): Das Bild der Schweiz bei Ebel, Boehlendorff und Hölderlin. In: Christoph Jamme / Otto Pöggeler (Hg.): „Frankfurt aber ist der Nabel dieser Erde“. Stuttgart, S. 58-72.
- Burdorf, Dieter (2001): Friedrich Hölderlin. München.
- Ebel, Johann Gottfried (1793a): Anleitung auf die nützlichste und genussvollste Art in der Schweiz zu reisen. Erster Theil. Zürich.
- Ebel, Johann Gottfried (1793b): Anleitung auf die nützlichste und genussvollste Art in der Schweiz zu reisen. Zweiter Theil. Zürich.
- Ebel, Johann Gottfried (1798): Schilderung des Gebirgsvolkes vom Kanton Appenzell. Erster Theil. Leipzig.

Germann, Thomas (1996): Johann Gottfried Ebel und sein Panorama von der Albishochwacht. In: Carthographica Helvetica 13, S. 23-30.

Haberkorn, Michaela (2004): Naturhistoriker und Zeitenseher. Geologie und Poesie um 1800. Der Kreis um Abraham Gottlob Werner. Frankfurt a. M.

Hölderlin, Friedrich (1992): Sämtliche Werke und Briefe. 3 Bde. Frankfurt a. M.

Klötzer, Wolfgang (Hg.) (1994): Frankfurter Biographie — Personalgeschichtliches Lexikon: Erster Band A-L. Frankfurt a. M.

Richter, Karl (1972): Literatur und Naturwissenschaft. München.

Schellenberger-Diederich, Erika (2006): Geopoetik. Studien zur Metaphorik des Gesteins in der Lyrik von Hölderlin bis Celan. Bielefeld.

Schelling, Esther (1975 / 76): Hölderlins Ode *Unter den Alpen gesungen*. Eine Kurzinterpretation. In: Hölderlin-Jahrbuch 19, S. 258-284.

Waiblinger, Wilhelm (2017): Friedrich Hölderlins Leben, Dichtung und Wahnsinn. Berlin.

Ziolkowski, Theodore (1994): Das Amt der Poeten. Die deutsche Romantik und ihre Institutionen. München.

カント (1999) 『カント全集 8』(『判断力批判 上』)、岩波書店。

桑島秀樹 (2008) 『崇高の美学』、講談社。

田野武夫 (2015) 『ヘルダーリンにおける自然概念の変遷』、鳥影社。

手塚富雄 (1980/81) 『ヘルダーリン』(全2巻)、中央公論社。

M・H・ニコルソン (小黒和子訳) (1989) 『暗い山と栄光の山：無限性の美学の展開』、国書刊行会。

廣川智貴 (2019) 『この世における神の享受』にみられる崇高なもの、「第2回研究発表会・シンポジウム 講演要旨集」(文化地質研究会)、22頁。

ヘルダーリン (1966) 『ヘルダーリン全集』(全4巻)、河出書房新社。

ルソー (安土正夫訳) (1960) 『新エロイーズ』(1)、岩波書店。

¹ Richter (1972: 69ff.).

² Schellenberger-Diederich (2006).

³ イギリスを中心とするヨーロッパにおける山のイメージの変遷については、ニコルソン (1989) を参照。

⁴ カント(1999: 135f.).

⁵ 「崇高」については桑島 (2008) を参照。この書物はわかりやすく「崇高」概念を紹介するものであり、山と「崇高」の関係についても多くの紙幅が割かれている。またカントへの言及もみられる。

⁶ ルソー(1960: 124f.).

⁷ Vgl. Ziolkowski (1994: 33).

⁸ Vgl. Ziolkowski (1994: 29-81).

⁹ 地質学の影響がみられる作品として、たとえば、『ファウスト』第2部を挙げることができる。その第

2 幕中の「古典的ヴァルプルギスの夜」では、火成論者アナクサゴラスと水成論者タレスの論争がみられる。アブラハム・ゴットロープ・ヴェルナーの影響を受けたゲーテは基本的には水成論者であった。しかし、火成論に「改宗した」アレクサンダー・フォン・フンボルトとも交流のあった彼は、しだいに水成論の正当性に疑問を抱くようになったという。Vgl. Haberkorn (2004: 141f.).

¹⁰ Klötzer (1994: 168).

¹¹ Ebel (1793a: 3).

¹² 参考までに『手引き一第1部』の章題を以下に挙げておこう。「予備報告：グラウビュンデンにかんする二三のこと」、「第1章：スイスを旅行する人のためのハンドブックとガイドブックについて」、「第2章：スイスは誰にとって注目すべきところなのか?」、「第3章：スイスでの滞在や旅行はどうすればもっと有益になるか?」、「第4章：スイスを旅行し、滞在する費用について」、「第5章：どのような方法で旅行するのが有益で、快適であるか?」、「第6章：スイスを旅行するにはどれくらいの時間がかかるか?」、「第7章：外国人は何月にスイスに来ればよいか?」、「第8章：もっとも安全かつ容易に徒歩旅行するのに必要な備品について」、「第9章：旅行者、とりわけ徒歩による旅行者のためのきまり」、「第10章：旅行プランの提案」、「第11章：どこで馬車が利用できて、どこでできないのか?」、「第12章：スイスの地図について」、「第13章：スイスのスケッチ、銅版画、パンフレット、および図版入り雑誌について」、「第14章：スイスにかんする旅行書の紹介、あるいはその批判」、「第15章：歴史、政治体制、地理、自然史などにかんする最高の書物の紹介」、「第16章：硬貨の種類と貨幣相場」、「第17章：さし絵の解説」。

¹³ Ebel (1793a: 7f.).

¹⁴ Ebel (1793a: 8).

¹⁵ Ebel (1793a: 9).

¹⁶ Vgl. Schellenberger-Diederich (2006: 61).

¹⁷ Ebel (1793a: 9).

¹⁸ Ebel (1798: 2).

¹⁹ Germann (1996: 26).

²⁰ たとえば、「アールブルク」(Aarburg)の項目には、次のように記されている。「アールガウ州の町。宿屋「大熊亭」あり。スイスで唯一の要塞が、郊外の高い石灰岩のうえにある。(…)展望：要塞と峠道の立地は絵画のような観察位置を提供する。要塞のもっとも高いところには、高いアルプスの連なりを見渡す広大な展望がある。」Ebel (1793b: 6). Vgl. auch Germann (1996: 26).

²¹ Waiblinger (2017: 23f.).

²² Schellenberger-Diederich (2006: 64f.). ちなみにこの文献は、「ツィンマーに」を地質学の観点から包括的に解釈した節をふくんでおり、エーベルの「線」にも言及している。Vgl. Schellenberger-Diederich (2006: 89-112).

²³ Ebel (1793a: 152).

²⁴ プロッケスの活躍した当時のハンブルクは、イギリスの影響を受けた自然神学の運動が盛んであった。プロッケスの主著『この世における神の享受』(1721-48)もその影響下にある。これについては廣川(2019)を参照。